



同志社人物誌 (52)

小崎弘道

土肥昭夫

小崎弘道（こざき・ひろみち 一八五六一
一九三八）は決してスマートな紳士風の人に
みえない。彼は丸顔で、背は低く、太り気味
の体格をし、説教はとつ弁で、何を言ってい
るのか、よくわからないというのが、大方の
印象であった。わずかに眼鏡の奥にみる瞳は
鋭く、ただの人物でないことをうかがわせる
だろう。彼は熊本洋学校の出身で、同志社に
学び、卒業後東京で伝道活動、言論活動に従
事し、新島の死後同志社社長として働き、一
八九七年辞職後再び上京して靈南坂教会牧師
として終生活動した。彼は文字通り日本のキ

リスト教界を代表する人物の一人であり、そ
のさまざまな要職をあげれば、それこそきり
がないだろう。

そこで彼の友人である植村正久が、多少の
皮肉をこめて、彼を実業界における洪沢栄一
のような人だといひ、「円満な性格、すこぶ
る多方面なる趣味、寛厚にして一見長者の如
き風采」といひ、また「その神学思想の穩健
なる、その事務的常識の熟達せる、……その
計画好きなる、これをして最も調法なる委
員、最も便利なる相談役、稀に見るところの
周旋家」とした（「小崎弘道氏就職四十年」

一九一九・一一）。たしかに、彼は頭がよく、
物事の理解は早く、何をやってもソツがな
く、物事処理する手腕もあざやかである。
人はみかけによらない——とは、彼にこそあ
てはまることわざである。

ところが、もうひとつのイメージが彼にあ
る。筆者は（旧制）大学を卒業後一年間靈南
坂教会伝道師として働き、その関係もあって
弘道の長男道雄牧師について小冊子を執筆し
た。^①その過程で、弘道を知る教会信徒の方が
たから、弘道と道雄に関する忌憚のない印象
をきいた。彼らは異句同音に前述した植村の
弘道評は道雄にあてはまるのであり、弘道は
とても剛胆で、私の強い人、一度目標を立て
たら、人びとのいう事もきかず、強引にやつ
てのける人だ、というのである。これには少
々おどろいた。植村はやはり外から弘道を見
たにすぎず、内からみれば違うんだなあ、と
考えさせられた。もっとも植村の観測も全く
見当違いというのではなく、それは小崎が目
標として立てたものをキリスト教界で実行し
ていく場合の一つの方法であった、とも思わ
れよう。そこで、彼が生涯をかけて、強気に
やりつづけたものは何であったか、をこのエ

ッセイでとりあつかいたい。それは日本のキリスト教の自立性の追求であった。いくつかの事例をとりあげ、この事を明らかにしよう。

まず、一致、組合両教会の合同運動における彼の言動である。この運動は、一八八六年三月より約四年間、両派の間にすすめられた。両派委員による合同教会規則草案の作成、その修正案の提出で、合同は実現するかと思われたが、新島のきびしい反対意見の提起にはじまり、組合側に慎重論が起り、両派のいきちがもあって、これは成立しなかった。^②

このとき、合同推進派の指導者の一人になったのは、小崎である。彼は、日本の教会が外国ミッションや宣教師の精神的、物質的援助をうけていたのでは、キリスト教は外国宗教とみられ、日本人にいくら伝道しても、説得力がない。そこで彼らから独立しなければならぬが、そのためには、両派が一致、合同して新しい教会をつくることがまず先決である、と考えた。彼はこれに関連して開かれた組合教会総会の紛糾をよくまとめ、一致教会側の指導者とも連絡をとりながら、合同の実現に尽力した。しかし、大勢が合同延期に赴いたために、どうすることも出来なかった。この運動の過程で、小崎は新島に対して

かななきびしい批判的態度をとり続けた。師新島に対する彼の屈折した憤りは、その後四十年を経て、日本のキリスト教の歴史を叙述したときにも、はっきりと読みとれる。その意味で、彼は決して田満で、寛厚な人ではなかったのである。

つぎに、一八九五年一〇月の第一〇回聯合教会總會が、その伝道部門にあたる日本基督教伝道会社に対するアメリカン・ボードの指定寄付金を謝絶したときのことである。當時は國家主義的風潮が強く、日清戰爭の勝利はこれをさらに刺激した。その結果、キリスト教に対する風当りもきびしかった。これをのりこえるためには、キリスト教が日本人のものであることをはっきりさせておく必要がある、外國ミッションよりの獨立は緊急の課題であつた。しかし、當時の伝道会社は國內寄付の二―四倍の金額の援助をミッションよりうけていた。伝道の困難な狀況では信徒數の増加は期待できない。ミッションの援助をこゝとれば、それによつて生活している伝道者はどうなるのか、伝道の範圍の縮小は免れないのではないか、という問題が當然のように起つた。実は前年の總會でも、ミッションよりの獨立の議案が提出されたが、今述べた問題が解けなかつたので、決議に至らなかつた。この難問を處理したのが、小崎である。日本の伝道は日本人の責任である、自主獨立の氣概があれば、金はあつまるという勇ましい賛成論をうけて、彼は、金をあつめる問題

谷屋
 今田社夫 語るハ愈々難解社夫會ニテ聞キ初メ細傳
 政事案ヲ以テ之ニシテ石ガハ此降社夫語ルニ在リ
 カル所ニ當ル且ツ明答アリテ其ノ如ク思ヘスナリ
 草一社夫語名カ不存ニ及對シ直ニ之ニ詳職ヲ許ス
 ル理由ヲ明白スヘキ事
 或ハ社夫ハ前社長ハ獨立事ヲ實行シタル故世間ノ攻
 撃ヲ受テ其責ヲ負フニ詳職シヨト云ニ又或ハ社夫ハ
 今田ノ政事ニ其教師ヲ詢セシモノアリ云々之ハ社
 夫ハ亦社ノ振立會ニ於テ石ガハ所ノ其主義方針
 ハ從來ノ異ニシテ聞ケル然レ又新社長ハ先吹栗
 示シテ同ナル校及會ニテ從來同志社ノ宣教師

1897年7月5日の小崎書簡

は独立の方法であり、まず独立の精神がわれわれにあるかどうか、である、これは組合教会の伝統的精神だから、一致できるはずだ、^④といって、まずこの決議をとった。そして、金をどのように集めるとか、伝道会社の運営の見通しをどうたてるか、という問題は懇談会で大いに論議すればよい、といって、寄付金謝絶に関する諸項目をすべて可決させてしまった。まことに強引そのものである。地方にあつて、乏しい援助金をあてにしつつ、懸命に伝道している伝道者たちの思いなどはきりすてられていたのである。

伝道会社はその後どうなったか。組合教会常議員会は普通寄付金(教会経常費より支出されるもの)、臨時寄付金(特別な時期に募金するものとか有志の寄付するもの)を各方面に依頼し、さらに特別寄付者を募て、寄付を求めた。その結果、しばらくはボードの寄付金に見合う金額をあつめることが出来た。しかし物価の上昇のため、従来のようなスケールで伝道することはできなくなった。^⑤

組合教会の伝道会社に対する寄付金謝絶の翌年に同志社とミッシェンの関係の断絶が起こった。このときに小崎は同志社社長とし

て、この問題にたち向かった。^④

大体、宣教師たちは熊本バンドに必ずしも好意をもっていなかった。彼らは小崎の聖書観を正統主義的でないと判断していた。一八九三年にシカゴで万国宗会議が開かれ、小崎はこれに参加したが、そこで日本の信徒たちはいつまでも宣教師の監視下に甘んじるものではない、宣教師は日本伝道の補助者、協力者、あるいは一人の日本人教役者のようにふるまうべきだ、^⑤といって彼らの神経を逆なでした。彼はまだ大人しい方で、日本の教会の即時独立や宣教師の人身攻撃さえするものが、熊本バンドで同志社に直接関係する者たちからあらわれた。もう一つの問題は同志社の資産問題であつた。その多くはミッシェンの援助で得られたものであるが、当時外国人が日本では財産所有権を法的に持てなかったため、日本人社員(理事)が名目上これを持つていた。同志社が社員制度を次第に確立し、その資産管理態勢を明確にしていっただめに、従来宣教師たちが管理していた宣教師館、病院、看病婦学校に対しても、同志社側より一定のクレームがつけられることになつた。

一八九五年一〇月に、宣教師の求めに応じて、アメリカン・ボードより四名の委員が来日し、同志社問題―つまりそのキリスト教主義教育の問題、資産管理の問題について協議した。その交渉にあつたのは、小崎、宮川経輝、湯浅治郎であつた。交渉は結局別れに終わった。委員は同志社の立場にかなり共感を示しつつも、同志社当局が希望すれば、当分の間教員を供給する、寄付金は漸次削減し、九八年末で打ち切るという報告書をボードに提出した。これに対して、九六年四月の社員会は、この年限りをもって、ミッシェンの寄付金および教員を謝絶する決議をした。彼らは現在同志社で教えている宣教師たちに辞職をせまったわけではないが、宣教師たちはこれまでの同志社側の処置に不満であり、また尋常中学校設置にともなうキリスト教主義教育のあり方に反対であつたため、この年の七月の宣教師年会で、全員辞職を決め、これを実行した。

小崎はのちにさきの同志社社員会の決議をミッシェンよりの独立とし、さきの組合教会の決議とならべて高く評価した(『小崎全集』三・六八―七二ほか)。しかし事態は必ずし

もそうではなかった。彼自身はそう思って、謝絶後国内募金に従事したり、宣教師が引きあげた後の神学校で神学教育の諸科目を担当していた。しかし、社員たちはこの処置を小崎社長の失策とし、結局彼を社長辞任に追いこんだ。彼の辞任後、同志社とミッションの関係は復旧した。

一八九七年四月の社員会で、彼はミッションとの関係や教育方針について社員の内に異論があり、将来の進路に困難を極めている現在、社員一同の信任を得ることが出来ないのは不徳のいたすところといって社長辞任を申し出た。しかし、九六年四月の社員会は全員一致でミッションとの関係をたち切る決議をしたのに、わずか一年にしてこれがくずれていくのはどうしたことか、あの辞任にいたる経過にどうもはつきりしないものがある——こう考えた小崎は、この年の七月五日に社員会であてて、怒りに満ちた手紙を書き送った。^⑤彼はそこで自分を信任してミッションよりの独立を決議しながら、どうしてその後自動揺し、自分を辞任にまで追いこんだか、と詰問し、同志社の独立方針を遂行することを期待し、これについて暖味な態度をとる現在

の横井時雄社長と社員会の総辞職を要求した。また彼は自分の募金活動に対して各方面より寄せられた協力を指摘し、資産ある社員は相当の寄付をすべきである、とせまった。このあたりの小崎は「稀に見るところの周旋家」などの類ではない。自己の所信をかかげて、孤軍奮闘する信念の人の面影がみられるのである。

日本のキリスト教の自立性を追求するならば、天皇制国家の支配原理よりの自立の問題がある。小崎はこの点になると、ミッションよりの独立ほどの鋭い感覚と認識を持ち合わせなかった。この点でも、彼は日本のキリスト教界の代表的存在であった。

〔注〕①拙著『小崎道雄の行動とその論理』(靈南坂教会、一九七二)

②高谷道男、きき手太田愛人『横浜バンド史話』(築地書館、一九八二)で、太田氏は、新島がアメリカン・ボードの宣教師のような資格を持っていたため、一致教会との合同に反対したとか、熊本バンドは新島に言われるとぐらつてしまったとか言われている。座談会程度のものだから別に気にするほどのことでもないが、もう少し事柄の本質をよく調べた上で、言っているものである。筆者はこれについて「一致、組合同教会の合同運動」(拙著『日本プロテス

タント教会の成立と展開」(教団出版局、一九七五、五六—九六頁)で詳しく論及しておいた。両氏とも、拙稿は勿論のこと、そこで提出した資料さえも読まないで、この問題をとりあつかわれているのは、残念というよりはかたない。

③拙稿『明治期における日本組合教会の独立運動』(同上書)参照。

④拙稿「キリスト教主義学校同志社の苦悩」(『同志社百年史 通史編一』一九七九 所収)はこの問題をあつかっている。

⑤この書簡は『同志社百年史 資料編二』一九七九に収められている。これは一九七六年に小崎家の御遺族より寄贈されたものであり、小崎の社長辞任の経過を知る上で貴重な資料である。

⑥この問題については、筆者の他の論文、たとえば「小崎弘道 一指導者の帰趨」(和田洋一編『同志社の思想家たち』下、同志社大学生協出版部、一九七三所収)、「小崎弘道」(『基督教文化学会年報』一九八二年)を参照。(大学神学部教授)